



# 目次

調教【放置/目隠し/三穴/輪姦】 .....	3
規律の崩壊 【体格差/二穴/二輪挿し】 .....	24
狂い爆ぜる蜜乳【母乳/背面駅弁/輪姦】 .....	60
悲哀と蹂躪 【BSS】 .....	84
完堕【スクワットオナニー/フェラ/三穴】 .....	100
【クンニ/クリ責め】 .....	108
【野外放尿/視姦/輪姦/三穴】 .....	113
暗躍【分岐点】 .....	128
ED1.....	130
ED2.....	142
ED3.....	152

## 調教【放置/目隠し/三穴/輪姦】

あれから散々犯されたカイトは、両足をこれ以上ないほど大きく左右に開かされた状態で、拠点の太い流木の柱にがっちりと括りつけられていた。

カイトの目元には、佐伯が身につけていたネクタイが幾重にもきつく巻きつけられ、その視界を完全に閉ざしている。

さらに、ナイフで適当に削ったであろう、ささくれの残る太い木の枝が、小さな口を裂かんばかりの勢いで奥深くねじ込まれていた。

両端を頑丈な植物のツタで後頭部へガチガチに縛り上げられた即席の猿ぐつわのせいで、カイトは顎を固定されたまま、閉じることすら許されない口からとめどなく唾液を溢れさせ、ただ「……ん、うっ、うーッ、んーッ！」と、鼻を鳴らすだけの哀れな獣へと成り下がっている。

完全に無防備に晒されたカイトの膣口からは、先ほど三人の男たちにこれでもかと注ぎ込まれたザーメンが、ごぶっ、ごぶっ、とみだらな音を立てて絶え間なく溢れ、ひんやりとした洞窟の床、珊瑚の欠片が混じる砂の上へとボタボタと垂れ落ちている。それをいやらしい笑みを浮かべながら見下ろす三人の男たち。

汗と泥、そしてカイトから搾り取った蜜で濡れた身体を誇示するように、シゲ、ショウ、佐伯は、ぐったりと調教され尽くしたカイトの家畜のような姿を品定めするように眺めていた。

「いい恰好じゃねえか」

シゲが下品な笑い声を上げながら、カイトの太ももをパチンと叩いた。

その衝撃で華奢な身体がビクッと跳ね、前後の孔からさらにドロリと濃厚な種汁が吹き零れる。

「せっかく注ぎ込んでやった極上の種だ、零さねえように蓋してやる」

固い異物がカイトの男の形に広がり切った前後の孔へ、容赦なく突き刺さる。

「……んぐうっ？！うううっ！んうっーーーー！」

声も出せないカイトは、肉体を襲う痛みにビクビクと怯え、ネクタイの奥の瞳からボロボロと涙を流すことしかできなかった。

やがて、男たちは満足したように笑いながら、カイトを暗がりに残したまま狩りや作業へと出かけていった。

どれほどの時間が経っただろうか。

男たちの足音が完全に消え失せると、拠点は恐ろしいほどの静寂に包まれた。

さっきまであれほど激しく蹂躪され、男たちの獣のような息遣いや、下品な笑い声、肉のぶつかるおぞましい音が溢れていた空間が、今は嘘のように静かだ。

入口から差し込んでいた血のようなオレンジ色の夕日はいつしか完全に没し、洞窟の奥には、どこか墓穴を思わせる冷たい湿った空気が、容赦なくカイトの剥き出しの肌へとまとわりついてくる。目隠しのせいで時間の感覚すら奪われたカイトの鼓膜を揺らすのは、外で絶え間なく岩にぶつかる、ざぶん、ざぶん、という低く重苦しい波の音と、自身の口から滴る唾液が地面をしとしと濡らす微かな音だけ。

時折、洞窟の天井から冷たい水滴がぽつり、と床の岩肌に弾ける音が、不気味なほど鮮明に反響した。

誰もいない。その圧倒的な孤独と、肌をじわじわと冷やしていく無人島の夜の闇が、カイトの心を内側から残酷に食い荒らししていく。

柱に縛り付けられたまま冷え切っていく肉体の中で、前後の孔に突き立てられた木杭の異様な存在感だけが、狂おしいほどに際立っていた。

（だれか……だれでもいいから、おねがい……っ、寂しい、寒い、痛い……誰でもいいから、早く戻ってきて）

思考を奪うほどの激しい快楽と苦痛の中にいた方が、まだマシだった。

誰もいない闇の中、一人きりで木の柱に縛り付けられていると、嫌でも己の身体の異常な現状を意識させられる。

カイトの体内で男たちの精液が熱く温まっていく中、前後の秘肉の隙間には、ヤシの油をたっぷりと塗られ、ツルツルとした肉厚な葉で包まれた二本の杭が深く根元まで突き刺さっていた。

ヌルヌルと滑らかな異物が、カイトの柔らかい粘膜を内側からぐいぐいと圧迫し、逃げ場のない強烈な充満感を絶え間なく与え続けている。

「んっうっ、…………う、ふ、うっ」

ほんの少し身体を動かすだけで、油を吸った葉が肉壁をみだらな音を立てて蠢き、声にならない悲鳴が口の中に虚しく響く。

「うううっ、んんーっ！」

柱から抜け出そうと、ほんの少しでも身体を動かせば、杭が引き絞られた窄まりを内側からガリガリと抉る。

声にならない悲鳴が口の中に虚しく響き、カイトの身体は小さく跳ね上がった。

だが、その衝撃でさらに杭が奥へと食い込み、粘膜を押し広げる。

（もう、嫌だ……ッ。だれか、…おねがいだから……っ）

目蓋の裏は真っ暗で、世界のすべてに置いていかれたような恐怖がカイトを支配する。

もしもこのまま、男たちが戻ってこなかったら。

自分はこの柱に縛り付けられたまま、口を塞がれ、前後の孔を杭で塞がれたまま、誰にも気づかれずに干からびて死んでいくのではないか。

（こわい……、こわい、こわいこわいこわいこわい怖い……っ！！）

心臓の音が耳の奥でうるさいほどに脈打ち、ネクタイの奥から溢れた涙が、頬を伝って木の枝の猿ぐつわを濡らしていく。

どれだけの時間が経ったのかもわからない。数時間なのか、数日なのか、時間の感覚さえもドロドロに溶けていく闇の中で、カイトはただ、自分が流し込まれた精液を保管するためだけの「生きた器」として放置される恐怖に、ガタガタと震え続けることしかできなかった。

放置されている間、自分の身体が男たちの種を吸って、じわじわと「雌」に作り替えられていくような、おぞましい熱さが下腹部に居座り続けている。

置いていかれるのが怖い。死ぬのが怖い。

けれど、それ以上に恐ろしいのは、あれほど自分を蹂躪した男たちの足音が近づいた瞬間に、「やっと暗闇から解放される」と、心のどこかで安堵してしまうだろう自分自身の狂気だった。

その時、静寂を切り裂いて、ザザッと草むらを分けて近づいてくる複数の足音が聞こえた。

恐怖に心臓が跳ね上がると同時に、最悪なことに、カイトの孔がヌルリと杭を締めつけて歓喜の蜜を分泌する。

「おーおー、ちゃんと大人しく留守番してたみたいだな」

足音と共に戻ってきた男たちのうち、ショウがカイトの股間を覗き込み、容赦なく、一気に前後の杭を引き抜いた。

杭が抜かれた瞬間、中で密閉され、カイトの体温でドロドロに熟成された大量の白濁が、ポンッ、と空気が抜けるようなおぞましい音と共に、ドバァッ、と勢いよく溢れ出す。

「んうっ…！」

異物から解放された安堵も束の間、堰を切ったように大量の種汁が、溢れ出て、地面を汚していく。



杭のせいで孔は完全に開きっぱなしになり、中身をぶちまけて  
ピクピクと蠢く無防備な粘膜は、男たちの狂った性欲をさらに  
煽るだけだった。

空気に触れて一瞬だけ冷えそうになったカイトの孔へ、間髪入  
れずに、シゲの猛り狂った巨大な質量が割り込んでいく。

ぐちゅうっ、どちゅッッッッッッッ♡♡

「んうううーーーーーッ！！」

「仕事終わりのキツキツガキまんこたまねえなあ！随分柔ら  
かくなったじゃねえかあ？あ？」

完全に無防備だったカイトの子宮口まで、肉壁を無理やり押し  
広げながら、狂暴な硬さが一気に突き上げる。

そこから、加減を知らないシゲの狂暴なピストンが、カイトの  
身体をこれでもかと揺さぶり始めた。

どちゅッ！どちゅッ！ぶちゅうううッッ！ズグッ、ズグッ、ズ  
グウンッ♡♡♡

「ん、む……ッ？！んうつつ、んうっ♡んーっ！ん、ん  
んっ、んっ♡う、う、ううつつ♡♡♡」

シゲの凶暴な質量に激しく突き上げられるたび、もう一つの空  
いた孔からは、種汁がごぶごぶとみだらな音を立てて噴き零れ  
た。

「やめて、壊れちゃう」とはっきりと叫びたいのに、口を塞がれているせいで、喉の奥から漏れるのは熱い鼻息とくぐもった悲鳴だけ。

「ガハハ！ 口じゃ何言っつか分かんねえが、おまんこは俺の  
ちんぽが欲しくてたまんねえってよオ！」

頭を殴られたような衝撃、それまで冷たく硬い木の杭に苛まれていた肉体にとって、割り込んできたそれは、信じられないほどに生々しく、凶悪なほどに熱かった。

恐怖していたはずの男たちの肉欲。自分を蹂躪するはずの、おぞましい欲棒

「あ？ おい見ろよ、このメスガキ……ッ！」

シゲが驚いたような、弾んだ声を上げた。

柱に縛り付けられ、身動きが取れないはずのカイトの腰が、自らシゲの股間へと向かって、より深くへと迎え入れるように蠢き始めたのだ。

（もっと、もっときて……ッ、なか、あつくして……ッッ♡）

嫌だ、怖い、助けて。そう泣き叫んでいたはずの恐怖心はどこかへ吹き飛び、今のカイトを支配しているのは「もっとこの熱い塊で中をめちゃくちゃに埋め尽くしてほしい」という獣めいた本能だけだった。

口にこじ入れられた木枝を、カタカタと哀れに震わせ、よだれを撒き散らしながら、カイトは無様に、必死に腰を振って強靱な欲棒を強請り続ける。

「へえ、置いてけぼりにされて相当寂しかったんだなァ？ 木の杭より、俺たちのちんぽの方が欲しくてたまんなかったのかあ？ 可愛いところあるじゃねえか」

カイトのあまりの淫乱な変貌に、男たちの興奮は最高潮に達する。

「おら、もっと奥まで咥え込めッ！ ほら、外で一ノ瀬がずーっと聞いてんぞ？」

シゲが泥臭い息を吹きかけながら、カイトの腰をへし折らんばかりの力で掴み、さらにピストンの速度を上げた。

ずぽっ！ ずぽっ！ ズグウッ！！

「ん、んんーッ！ む、うううーッ♡♡」

ぐちゅうっ、ジュブ、ズブズブッ！！

「んーッ！ んうっ、んぐうーッ！！♡♡」

「おいシゲさん、その猿ぐつわも縄も、一回全部外してやろう。  
可愛い啼き声聞かせてやろうぜ♡」

ショウがおちょくるようなニヤニヤとした笑みを浮かべ、カイトの口に噛ませていた木の枝を乱暴に引き抜き、同時に流木の柱に縛り付けていた縄を解いた。

ガクン、とすべての拘束から解放されたカイトの華奢な身体は、支えを失って地面へと無様に崩れ落ちる。

昼間の放置プレイとシゲの暴力的なピストンの衝撃で、肉体は悲鳴を上げている。疲労感から逃げるところか指一本動かすこともできない。

じょぱっと口から溢れ出たよだれとともに、カイトの割れた唇から、ようやく肉声の悲鳴が弾け飛ぶ。

「ぶはっ……！ はあっ、はあっ、ひ、あっ……！ あ、あ  
ぐうっ……痛、いっつ、おねがい、もう、ゆるし、  
てえ……っ！」

自由になった腕で抵抗することすら思いつかず、ただ地面に這いつくばるカイトの下へ、シゲがニヤニヤと笑みを浮かべながら自ら仰向けに滑り込んだ。カイトの華奢な身体を正面からガシッと抱きすくめると、床に押し付けるようにして、上向きにその強烈な欲棒を、突き当りの前孔へとズブウッ！と突き上げる。

グチュウウーッ！ズグッ！！

「んぐ、うう？！う、あつ、あ、あアアアアアッ！！」  
ゴツン！と、シゲの凶悪な質量がカイトの最も敏感な突き当たりを無慈悲に決った。

ドロドロに熟れ切った孔は、強引に最奥まで突き入れられた衝撃で、ドブッ、ジュクッ！と卑猥な肉汁を四方に飛び散らせた。

ドスッ！ドスッ！ズチュッズチュッ！！

さらに、待ってましたとばかりにショウと佐伯が一斉に群がった。

「じゃあ俺、こっちの孔と乳首弄ってあげる。良かったね。声出せるようになって、もっとデカイ声で啼いていいよ！」

シゲの胸の上に組み伏せられ、無様に上へと突き出されたカイトの尻。その完全に無防備に開いていた後孔へと、ショウが後ろから覆いかぶさるようにして自身の欲棒を容赦なくブチ込んだ。

ズブツツ！ズツ！ズツ！ズグ、ズグ、グジュツツツツツ♡♡  
「ひ、あつ、んんーッ！や、あつ、おしり、だ  
めええっ！」

同時に、シゲの身体と板挟みになって震えるカイトの胸元へ脇から手を伸ばし、芯を持った突起を指先でギリギリと強く握り上げる。

「やああつ、ち、ちくび、いやああつ、んあぁあつ♡」

下からはシゲに膣を上向きに突き上げられ、上からはショウの体重を乗せたピストンで後孔を垂直に抉られ、カイトの身体が二人の男の肉体の間でガタガタと激しく跳ね上がる。  
そこへさらに、カイトの顔の前へ回り込んだ佐伯が、髪を強引に掴んでその顔を引き起こした。

「ほら、口も余ってんだろ。シゲさんとショウの腰に合わせて、僕のもしっかり扱いてくれよ」

涎を垂らして開いたままの口内へ、佐伯の猛り狂った欲棒が、喉の奥深くまでずっばりと突き刺さる。

「ん、ぐ、うううーッ！？ う、んむっ、んんん  
ーッ♡♡」

下からはシゲの腹の奥まで響くような加減を知らない重量級のピストンが子宮口を深く挟り、上からはショウが内臓を押し潰すように後孔を激しく突き上げる。

男二人の肉体に上下から挟まれ、骨ごと押し潰されそうになりながら、さらに胸はそのショウの指に玩具のように弄ばれていた。

逃げ場のない正面からは、佐伯に頭をがっちり固定されて口を完全に塞がれ、その強靱な欲棒に喉の奥を容赦なく衝かれる。全身のすべての孔と性感帯を、三人の男たちに同時に占拠される絶望。

ぐちゃぐちゃに混ざり合う全方位からの快樂が、カイトの未熟な肉体を苛烈に焼き尽くしていく。

「ほら、誰のちんぽが一番いいか言ってみろよ？ 昼間ずっと杭で広げられてたから、俺たちのちんぽが恋しくてたまんなかったんだろ？」

ショウが乳首を弄りながら、カイトに恥辱を強いる。

佐伯のモノが不意に口から引き抜かれ、カイトはよだれをダラダラと垂らしながら、激しく首を横に振った。

「ぶあっ、はあっ、ひ、ん、ち、ちが……っ！ ……しゅき、じゃ、にゃいい……っ♡」

外で聞いている一ノ瀬への罪悪感、そして残った最後の理性を振り絞って必死に否定するが、それが男たちの嗜虐心をさらに燃え上がらせる。

「あ？ 違わねえだろ。ほら、正直に言わないと全員でもっとめちゃうちゃにしちゃうよ？ ほら、誰のちんぽが一番気持ちいいの？ 言ってみなよ！」

ショウがカイトの髪を掴み上げ、乳首をぎりぎりとしぎらんばかりに強く引っ張る。

前からはシゲの太い剛直に犯され、肉壁を千切らんばかりの猛烈な連続突きで奥を執拗に突き上げまくっていた。

ドスッドスッドスッ！ どちゅ、ぐちゅうううッッ！ ズグンッ、ズグウンッッ♡♡

「ひ、ひいぎいい……っ！ イヤぁぁぁぁ、とまっ  
てええ……っ！！ んむうつん、んぐっ、ううう  
うーッッ！？ う、んむっ、んんんーッッ♡♡」

再び佐伯の塊で喉の奥を完全に塞がれ、カイトの視界が涙でぐにやぐにやに歪む。息を吐き出すことすら許されないそのの圧迫状態の中、上下からカイトの肉体を板挟みにした二人の男が、容赦のない狂暴な連動ピストンを開始した。



シゲが下からズグウッ！と子宮の入り口を上向きに突き上げれば、カイトの身体がシゲの胸の上でわずかに浮き上がる。その瞬間を逃さず、今度は上から覆いかぶさるショウが体重のすべてを乗せて、後孔へ垂直に、ドスッ！と猛烈な質量を叩き落とした。

どちゅッ！グズウッ！どちゅッ！グズウッ！！

「ん、んおおッ！？む、うううーッッ♡♡う、んん、んんんーッ♡♡♡」

前後の孔を交互に、寸分の狂いもなくハイスピードで穿たれるたび、カイトの華奢な肉体は二人の狭間で無様にバウンドし続けた。

下から子宮を挟まれる衝撃に喉の奥から悲鳴がハジけ飛ぶが、それを吐き出す前に今度は上から直腸を押し潰され、声にならない悲鳴が佐伯の欲棒の隙間から細いよだれとともにじょぼじょぼと噴き零れた。

ズグズグズグッ！ドスドスドスッ！！

「ん、ソッ……ーッッ♡♡おごっ♡おっ♡ソッ……オ♡おっ♡う♡んおおおっ♡♡♡」

狭い骨盤の中で、シゲとショウの欲棒が、薄い肉壁を挟んで交互に滑り、ギリギリと擦れ合うおぞましい内圧。

乳首をショウの指でぐにぐにッ、ぐにい〜……っつと振じ切られんばかりに弄られながら、休む暇もなく上下からマシンのようにドスドスと交互に突き上げられるたび、カイトの脳髄は完全に快楽の飽和状態を迎えて白く染まっていく。

「ガハハ！ おいショウ、カイトのナカ、お前のちんぽにドスド突かれるたびにギチギチに締め付けてきやがる！」

「あはは、本当だ！ 俺が上から踏み潰すたびに、シゲさんのザーメンがお尻の隙間からブチュブチュ溢れてきてめっちゃエロい！」

「ん、んおっ！？ おおお、ああああッ♡♡♡」

狂う、狂ってしまう、上下の孔から、内臓ごと交互に押し潰されるような強烈すぎる重力がカイトの性感帯を直撃する。

「ん、んむううーッ！？ む、んん、んんん  
ーッ♡♡♡」

カイトが白目を剥いてガタガタと四肢を痙攣させた瞬間、ナカの締め付けが異常なほど跳ね上がる。

限界の絶頂を迎えた瞬間、すっかり雌として開発され尽くした膣口から、完全に制御を失いプシャっ！と派手に潮を噴き上げる。

「カイトくん触ってないのに潮噴いてやんの！」

「ナカが引きつけ起こしてやがる！スケベな身体しやがって！」

いきっぱなしでピクピクと痙攣する肉体には、休む暇など1ミリも与えられない。

カイトが潮を噴いて腰をガタガタと震わせている最中も、シゲとショウは下卑た笑い声を響かせながら、さらに無慈悲にドスドスと上下からの交互にピストンを叩き込み続けた。

「どうだあ？カイトお、ちんぽに両方ズボズボ抉られて気持ちいदारお？」

佐伯がねっとりと自身の欲棒を引き抜くと、カイトの開いた口からは糸を引く涎が床へ溢れ出す。

全身を同時に責め立てられ、絶頂の波に全方位から溺れさせられたカイトの理性も人としての矜持も、恐怖と圧倒的な快楽で磨り潰される。そんな快楽の暴力に屈したカイトは、ついに自らその最悪な言葉を喉の奥から絞り出した。

「ひ、ひい、あ、あう……っ、き、…もち、い……おちん、ぽ……お、ちんぽ、きもち、い、れしゅううううツツ♡♡♡」

「ん？聞こえないけど？もっとおっきな声で言いな？ちゃんと一ノ瀬にも聞こえるようにさ」

「声が小さくて何言ってっか分かんねえよなあ！」

しかし、やっと声が出せるようになったカイトに、ショウは冷酷な笑みを向けた。

今度はスピードを落とし、カイトのナカを執拗に廻るようなねちっこい律動に変えた。

とちゅ、とちゅちゅッ……ぐちゅううう、どちゅッ♡♡

「ひぐうッ！……おッ、あッ…、あ…、まゝた、イクッ、イクイクいぐいぐうッッッ♡」

膣と後孔に極太の欲棒を同時に根元まで押し付けられ、肉壁のひだをとちゅ、とちゅ、とちゅ、と小刻みにねちっこく擦り上げられる衝撃。

カイトの身体はすでに快樂の許容量を超えており、とっくに限界の絶頂を迎えているにもかかわらず、二人がナカをじりじりと抉るたびに強制的に何度も、何度も絶頂を繰り返させられる。

「あはは！ カイトくん、ちんぽ押し付けられるだけでビクビク跳ねて、ずっとイきっぱなしじゃん！ ほら、そんなに気持ちいいなら、早く大きい声で白状しな！」

ショウに乳首をギリギリと千切らんばかりに握じられ、ナカを二本の質量でギチギチに圧迫されながら、カイトはよだれをダラダラと垂らして喉が裂けんばかりの声量で叫んだ。

「お、おっ、お、ちんぽ、しゅきいっ、しゅきにゃの  
おおおっ！ おちんぽ、だいちゅき、れしゅううううッッ♡  
♡♡」

大声で強請っているという恥辱。

カイトが完全に雌として、男たちの性処理ペットとして屈服した瞬間、男たちのゲスな興奮はリミッターを完全に失った。

「やっと白状したぜ！ おちんぽ大好きだってよォ！ じゃあ朝まで遠慮なく、そのやらしい身体を全員でブチ壊してやるよッ！！」

ズグッ、ズグッ！！と、拠点の地面を激しく鳴らすほどの猛烈な突き上げがカイトの奥を責め立てる。

限界を超えた陵辱の衝撃に、カイトが意識を快楽の彼方へと飛ばされ、ビクビクと魚のように跳ね上がった瞬間、シゲの巨大な欲棒から、えげつない量の精液がドクドクとカイトのナカへとブチまけられた。

「んおおー—————ッ♡♡」

口から喉が裂けんばかりの絶頂の悲鳴が漏れ、身体を弓なりに激しく痙攣させる。

しかし、シゲのモノがずるりと抜けた瞬間、余韻に浸る暇すら与えられず、今度はショウがカイトのガポガポに開きっぱなしになった窄まりへと、自身の欲棒を迷わずズブウッ、と力任せに突き刺した。